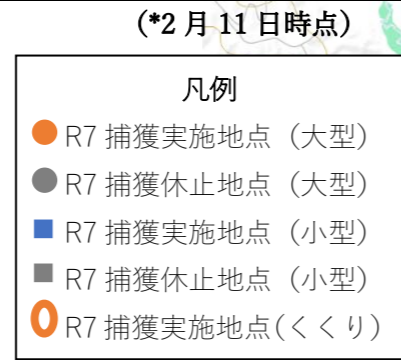


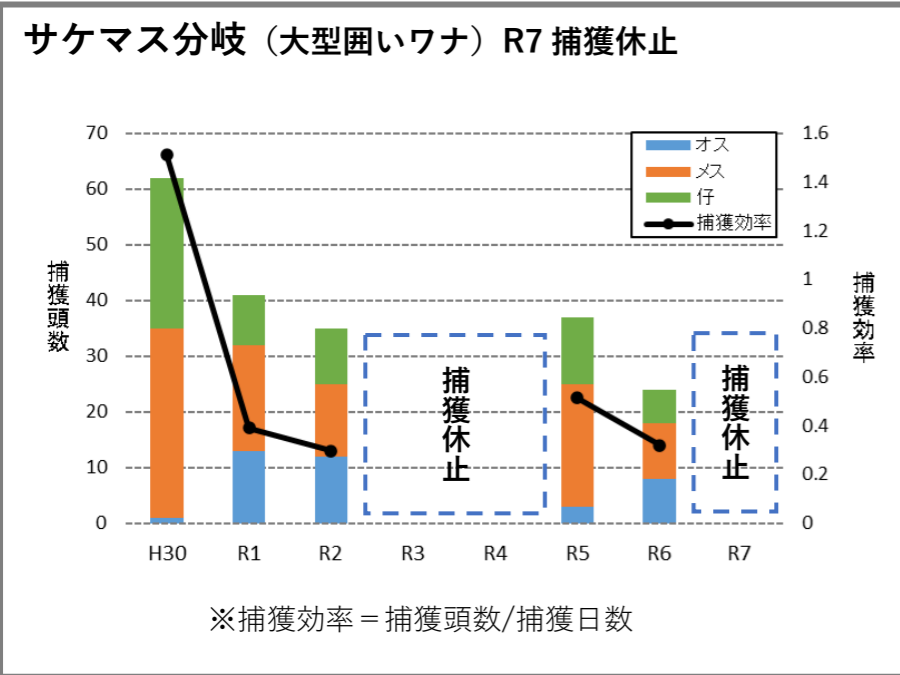
令和 7 年度エゾシカ捕獲対策の実施状況

| 1. A 地区における捕獲結果 (第 1 期) | | | | (第 2 期) | | | |
|----------------------------|-------|-------|-------|---------|-------|-------|-------|
| H30 年度 | R1 年度 | R2 年度 | R3 年度 | R4 年度 | R5 年度 | R6 年度 | R7 年度 |
| 62 頭 | 64 頭 | 89 頭 | 86 頭 | 56 頭 | 85 頭 | 91 頭 | 128 頭 |



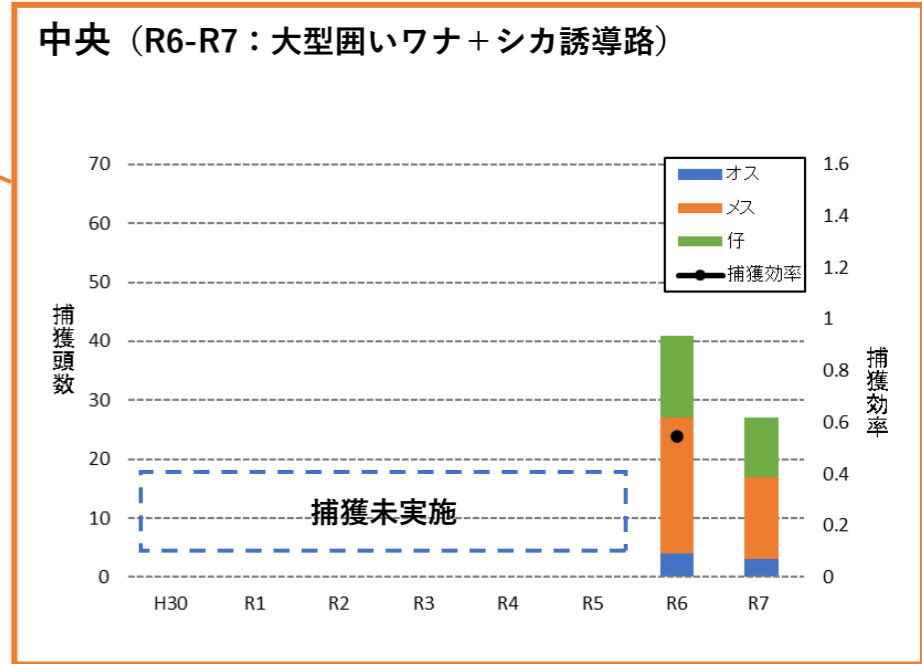
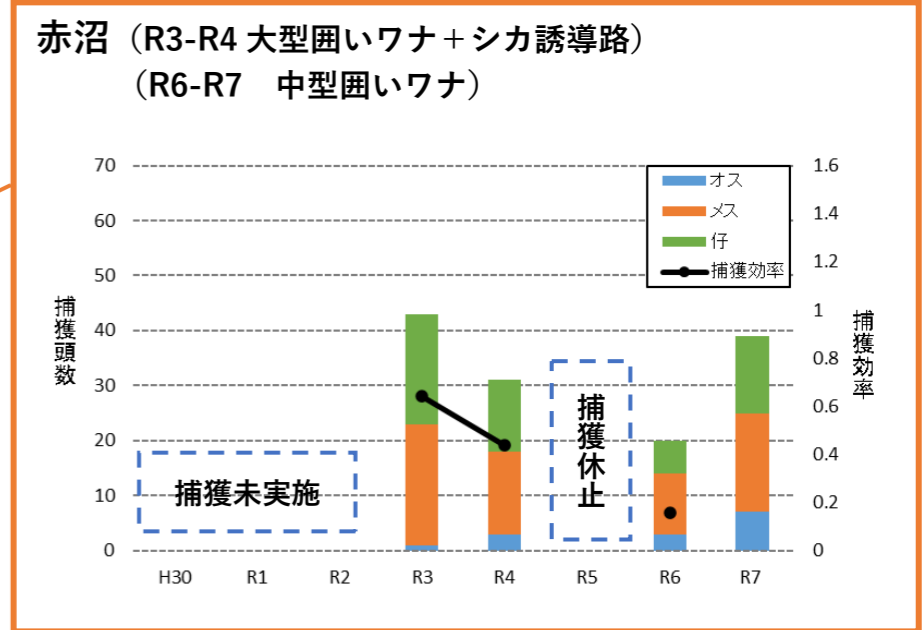
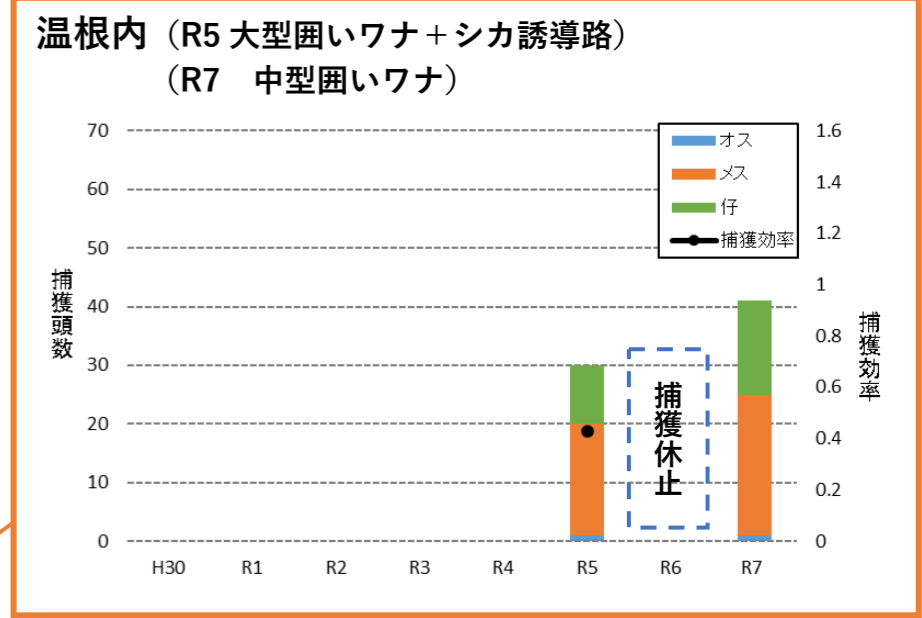
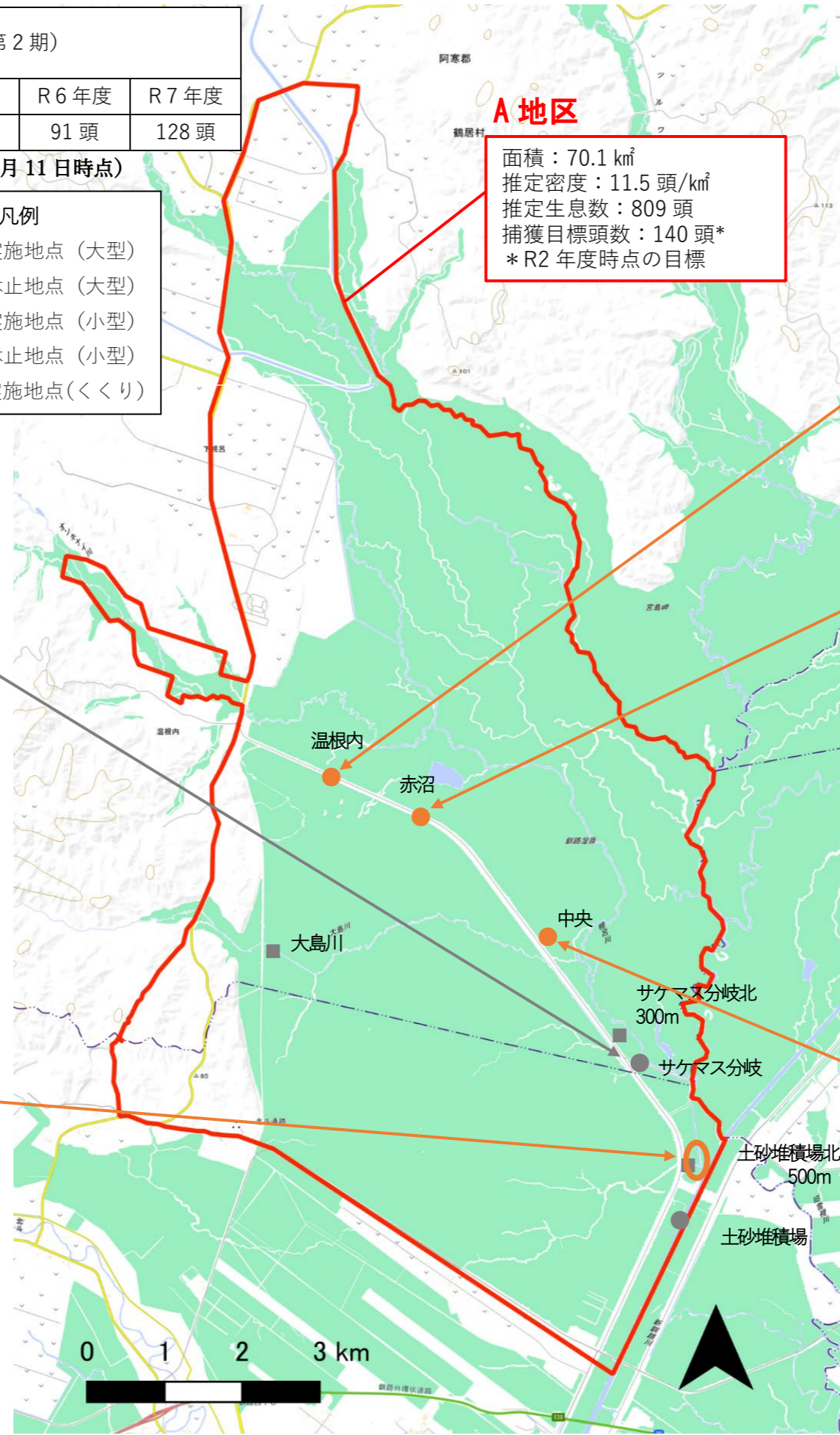
A 地区

面積：70.1 km²
 推定密度：11.5 頭/km²
 推定生息数：809 頭
 捕獲目標頭数：140 頭*
 * R2 年度時点の目標



土砂堆積場北 500m (湿原内、くくりわな捕獲試験)

R6 年度 計 6 頭捕獲 (50 罟日)
 (内訳：オス 2 頭、メス 1 頭、仔 3 頭)
 R7 年度 計 20 頭捕獲 (40 罟日)
 (内訳：オス 5 頭、メス 7 頭、仔 8 頭)



2. 各捕獲場所における捕獲実施状況

令和6年度より堤防法面に設置する中型囲い罟を導入し有効性が示された。これにより捕獲場所の拡大と秋季の捕獲が可能となった。令和7年度は昨年度同様に高層湿原エリアの保全に主眼を置き、温根内、赤沼に中型囲い罟、中央に大型囲い罟を配置して捕獲を実施した。また、捕獲試験として堤防道路南部でくくり罟による捕獲と吹き矢・麻酔銃による捕獲を試行した。表1に2月11日時点の捕獲実施状況を示した。

また、(1)～(4)に各ワナの捕獲状況の詳細、(5)に捕獲対策全体の検討課題を示した。

表1. 捕獲実施状況 (2月11日時点)

| 捕獲地点 | 方法 | 捕獲期間 | 捕獲回数 | 予定回数 | 小計 | オス | メス | 仔 | |
|---------|----------------|-------------------------|------|-------------|---------|--------|----|----|----|
| | | | | | | | | オス | メス |
| 温根内 | 中型囲い罟 | 10月23日～2月末 | 5回 | あわせて 15回 | 41 | 1 | 24 | 8 | 8 |
| 赤沼 | 中型囲い罟 | 10月23日～2月末 | 6回 | | 39 (4) | 7 (4) | 18 | 6 | 8 |
| 中央 | 大型囲い罟 + 誘導路 | 1月14日～2月末 | 2回 | 5回 | 27 | 3 | 14 | 6 | 4 |
| 土場北500m | くくり罟 | 1月19日～21日、 1月26日～29日 | 40罟日 | 50罟日 | 20 | 5 | 7 | 4 | 4 |
| 南部 | 麻酔銃 | 2月3日～ | 1回 | | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 捕獲数合計 | | | | | 128 (4) | 16 (4) | 64 | 24 | 24 |

()内は吹き矢・麻酔銃による捕獲頭数

(1) 中型囲い罟【温根内、赤沼】

<実施内容>

- ・ 周囲長約 30m の中型囲い罟を使用
- ・ 捕獲個体は生体搬出
- ・ 2基(温根内、赤沼)を10月23日から稼働(令和6年度は赤沼1基)
- ・ エゾシカが入り易い構造にするため、ゲートを道路側と湿原側2カ所に設置
- ・ 赤沼で麻酔による問題個体の排除を実施し、オス4頭を吹き矢、麻酔銃で捕獲
- ・ 秋季から2基の罟を運用し捕獲期間を長くとれたことや、エゾシカ堤防に集まる時期に捕獲実施が出来たこと等の要因もあり概ね順調に捕獲が進んでいる
- ・ 捕獲直後にもエゾシカが罟内に入り採餌している様子が確認されており、構造改良の効果は出ている印象がある。今後データから効果を確認する予定

<課題と対策>

- ・ 風速 20m を超す暴風にともなう罟の倒壊が11月から1月にかけて赤沼・温根内ともに3回発生した。
- ・ 各回ともに2-3日内で修復し稼働

- ⇒捕獲直前まで壁面の幕を半分下ろすことで風の影響を軽減した
- ・温根内で捕獲後、追い込み時に1頭にゲートを破られ逃亡された
⇒ゲートの構造もしくは素材の改良を検討
 - ・赤沼の罾周辺ではオスの個体数が増加しており、現在4頭前後が罾に誘引されているほか、罾周辺の1km圏内最大で11頭のオスの群れを確認している
⇒罾でオスを捕獲できるのは最大で2頭、メスを含めると1頭であるため、麻酔捕獲を併用して徐々に周辺のオスを減らしながら、捕獲を進めている
 - ・赤沼の罾内で野犬により弱った仔1頭が罾内で捕食された。その後は野犬の撮影はないが、引き続き監視を続け野犬が現れた場合は罾内における誘引を止めるなどの対策を講じる
 - ・赤沼で頻繁におとずれていた標識個体が12月以降現れなくなり、死亡した可能性が考えられる



写真1. 罾の全景（温根内）



写真2. 倒壊した罾（温根内）



写真3. 罾の全景（赤沼）



写真4. 幕を一部下ろした状態（赤沼）

(2) 【中央】大型囲い罠+シカ誘導路

<実施内容>

- ・周囲長約 40m の大型囲い罠とシカ誘導路を設置して捕獲を実施
- ・ゲートを湿原側に 2 ヶ所設置
- ・捕獲を 2 回実施した後も 40 頭前後のエゾシカが誘引されており、昨年度と同程度の捕獲数が期待される
- ・令和 6 年度に標識を装着した個体を自動撮影カメラ、目視で 4 回確認。罠に訪れる頻度は低く、12 月から 1 月に観察している段階では、常に罠周辺を利用する個体ではないと考えられる
- ・より慣れた個体に標識を装着できることが望ましい



写真 5. 罠の全景



写真 6. 誘引状況

(3) 【土砂堆積場北 500m】くくり罠

<目的>

- ・タンチョウ等希少動物に配慮したくくりワナの運用試験
- ・公園利用者への配慮や湿原における運用に対する検証と課題抽出

<実施内容>

- ・1月19日～21日、1月26日～28日の計4日間、各10基の罠を設置（40罠日）
- ・捕獲個体は釧路広域連合清掃工場に搬入。受け入れ上限は5頭/日
- ・専門家にヒアリングし、当該地区は冬季タンチョウの利用がない可能性が高く、捕獲前に痕跡調査をすることでより錯誤捕獲が回避できること、ねぐら付近以外では夜間に林内を歩くことはなく夜間の捕獲実施も問題ない等の助言を受けた
- ・令和7年度は、①実施前にタンチョウの利用の痕跡有無を確認、②通信式カメラを設置し待機監視なし、③夜間も含める方法で捕獲を実施した

- ・40 罨日あたり 20 頭 (0.5 頭／罨日) と高い捕獲効率が得られた。これは、夜間も含めて捕獲実施したことに加え、2 年目の給餌による誘引結果が良好だったことが要因として考えられる

<課題>

- ・捕獲数が5頭を超過した場合は搬入先の上限を超えてしまうため、解体作業が必要
- ・くくり罨は捕獲効率が低下していく事例が多く、当該地区においても効率は低下していく可能性がある
- ・1月28日早朝見回り時に捕獲個体1頭を野犬が捕食していた。野犬を監視しながら捕獲個体と罨を撤去し、捕獲を中止した。
⇒野犬の同行にも注意することと、出没時の対応を今後の運用の際には検討する必要がある



写真7. 設置環境
湿原内の林を活用



写真8. 捕獲中も付近にいるエゾシカ

(4) 【麻醉銃による捕獲】

<目的>

- ・罨罨で捕獲しにくい個体の割合が増えた場合に備えて、新たな捕獲手法の一つとして麻醉銃捕獲を試行し、有用性や捕獲に対するシカの反応、実施時の課題などを検討する。

<試行内容>

- ・罨罨による捕獲を実施しない右岸堤防道路の南側で実施を予定
- ・堤防上で給餌を行うのと同時に射手が堤体上で麻醉銃を構え、誘引餌に近づく個体や周辺の個体を捕獲する
- ・捕獲と同じ状況にシカを慣れさせるため、事前に堤体になが下りた状態で給餌を行う。
- ・捕獲時の周辺のエゾシカの反応や捕獲前後の誘引状況などを記録する
- ・撤収時に給餌を行い、捕獲作業と給餌を結び付けて学習させることで、周辺のシカにストレスが発生することを防ぐ
- ・罨罨を補完する手法として、課題や留意点を整理する

・2月2日～6日の期間に実施を予定

(5) 今後の捕獲戦略に向けて

令和7年度は、中型囲い罠を活用することで、令和6年度に比べさらに高層湿原エリアを中心とした罠の配置を実現するとともに、捕獲数を増加させることができた。

捕獲数増加の背景には、①わな周囲のエゾシカの増加、②捕獲手法の工夫による捕獲圧の向上、③気候の影響などの要因が複合的に作用していることが考えられる。

特に②については、今後の目標達成に向けて非常に重要であることから、今年度得られた知見と今後の検討課題を整理する。

ア 囲い罠の捕獲効率の最大化

○ゲートを増やす

- ・罠の外から餌が見えることで誘引効果が上がるという知見や、先が見通せる構造のほうが警戒されにくいという知見に基づいた方法で、北米やニュージーランドで取り入れられている
- ・令和7年度：右岸堤防においても有用であるという感覚がえられた
- ・今後：効果の検証や、より頑丈かつ効果的な複数ゲートの運用方法の検討

○給餌の工夫

- ・令和5年度の捕獲対策業務において、高い捕獲効率を維持するには給餌時に集まったすべての個体に誘引餌を学習させることが重要であることが示された。
- ・今年度：20m程の帯状に餌を置くことで、40頭程度が同時に採餌する様子が見られた。
- ・今後：誘引の効果をより高める工夫を継続することが望ましい

○標識個体の利用

- ・これまでの捕獲で、他の個体が罠に入りやすくするために、罠に慣れた標識個体を放獣していた。
- ・令和7年度：赤沼の標識個体の死亡が予想される
- ・今後：各罠で標識した個体を放獣し、罠に入りやすくする

イ 新たな捕獲手法の検討

囲い罠は多頭数を同時に捕獲できる強みはあるが、捕獲を続けると捕獲効率が低下することが報告されている。そのため、今後は釧路湿原で応用可能な様々な捕獲手法を、各手法の特性や、コストなど複数の観点で検討し、捕獲効率を最大化する必要がある。

- ・令和7年度：くくり罠と麻醉銃を試行
- ・今後：より効率的、効果的な手法の検討と各手法の特性を考慮した配置の検討

ウ 捕獲期間と方法の最適化

令和6年度の捕獲において、秋季に堤防上で捕獲することの重要性が示された。

- ・令和7年度：秋（11月-12月）の堤防捕獲で39頭を捕獲（表2）。給餌の継続や構造の工夫により冬季も効率的に捕獲
- ・今後：秋季の強風を想定した堤防での捕獲手法を検討。より効率的な捕獲方法の検討

表2. 過年度の月別の捕獲頭数（2月11日時点）

| 月 | H30 | R1 | R2 | R3 | R4 | R5 | R6 | R7 |
|-----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 11月 | | | | | | 1 | 8 | 10 |
| 12月 | | 16 | 29 | 5 | | 2 | 14 | 29 |
| 1月 | | 14 | 28 | 45 | 41 | 31 | 34 | 85 |
| 2月 | 15 | 6 | 32 | 36 | 14 | 47 | 35 | 4 |
| 3月 | 47 | 4 | | | 1 | 4 | | |
| 合計 | 62 | 40 | 89 | 86 | 56 | 85 | 91 | 128 |